第一次世界大戦中の板東俘虜収容所における日本語・ドイツ語のコミュニケーション状況

垣　本　せつ子*

伝統的な軍隊のコミュニケーションは指示と服従から成り立っている。そこに異文化の要素が入ると、この意思疎通に支障が起きる可能性が増すことから、緊張の度合いは高まると考えられる。しかし、これから本稿で紹介するように、状況によっては、言語の違いから生じるコミュニケーションのギャップから、閉塞感の支配する俘虜収容所のような場所においてさえ、ユーモアが生まれる。本稿では、第一次世界大戦でドイツと日本が戦った結果、その後約五年間、俘虜収容所で向き合った両国民がおかれたコミュニケーションの条件を探り、外国語を学習するきっかけについて考えてみたい。

1．日本側のドイツ人俘虜受け入れ準備とコミュニケーションの把握

第一次世界大戦中に三国協商側についた日本は、ドイツの租借地であった青島（中国）へ出兵し、圧倒的な兵力の差（日本：イギリス軍千人を加えた二万九千人、ドイツ：義勇兵中心の五千人）で独軍を降伏させた。1914年10月 9 日に第一陣として55名が、続いて計4600余名のドイツ人が捕虜として日本へやって来た。日本は既に日露戦争で国内の俘虜収容所にロシア人の捕虜を収容した経験を持ち、[1] 捕虜に関する当時の国際法規、ハーグ条約に則って捕虜を取り扱っていることを内外に示す必要もあり、戦争の始まった翌月、1914年 9 月には俘虜情報局を設置している。俘虜情報局は戦争処理の終わるまでの五年間、ドイツ人捕虜の状況把握とドイツからの問い合わせへの対応、当時ドイツに残留していた日本人の安否確認、及び他国の捕虜取り扱いについての情報収集を行った。

日本軍が長崎を出発するのは1914年 8 月28日であるが、これに先立ち 8 月中に通訳の配置について調整が行われた。8 月18日には各隊の通訳の割り当てが決定される（別表 1）。各団隊長及び兵站監は指定された範囲内で通訳を「彼此融通スルコトヲ得」とされた。中国語通訳の五分の一、ドイツ語・英語通訳をそれぞれ半分まで奏任待遇とする案は「人員確保」のため削除された。[2] 奏任官は大臣の任命する上級官吏であり、奏任官ではない通訳は担当部署の長が任命する判任官である。この配属表交付に先だって 8 月21日には派遣大隊から陸軍次官当てに「英国将校ノ通訳各一ヲ配属スル必要ヲ認ム当方ニテ雇イ入レテ差シ支エナキヤ」と問い合わせる電報が届いており、次官の了承印が記載されている。通訳の人選はこうしてほとんど現地の裁量で、必要に応じて行われた。しか

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

しこのことは、一般に通訳の能力を軽視し、通訳への信頼が欠如していたことの原因となった。

ドイツ人捕虜たちは来日した当初、寺社や公会堂を借りて宿泊していたが、やがて国内12カ所（開設順に、東京・静岡・大分・名古屋・姫路・松山・丸亀・徳島・大阪・福岡・久留米・熊本）に開設された俘虜収容所に移っていった。収容所では新たに通訳の配置が指示される。1915年 3 月時点では、以下の表に示すように、6 カ所の収容所に配置された通訳の数が明らかである。[3] 捕虜の人数は『「第九の里」　ドイツ村』より転記した。[4]

	収容俘虜	尉官	下士及び判任文官
静岡	約100名	1（兼務 1）	3（内通訳 1）
徳島	206名	1（兼務 1）	3（内通訳 1）
大分	205名	1（兼務 1）	3（内通訳 1）
福岡	約450名	3	6（内通訳 2）
久留米	約410名	3	5（内通訳 2）
熊本	約500名	3	5（内通訳 2）

（人）

この表によれば、捕虜100名から250名に一人しか通訳は配置されていない。俘虜収容所では軍隊内同様、命令の伝達という一方向の情報の流れのみが考えられていたからである。

ところで軍隊には外国語に熟達した士官たちもいた。戦争勃発直後の旧陸軍文書には、派遣大隊の軍人で、語学力がある者の調査結果が下記の表のように収録されている。[5]

	中国語	ドイツ語	英語	フランス語	ロシア語
将校	1	41	2	3	0
下士	30	0	56	12	1

（人）

ドイツ軍と戦うために、将校の中ではドイツ語のできる者が圧倒的に多い。戦争終結後の1920年の軍隊教育令の改正により設立された陸軍士官学校予科の学修要覧では外国語学習について「外国語は英・仏・独・露・支那語中、その一を授け、普通の文章を読解する能力を与え、兼ねて日常の会話並び作文をも授くるを要す」とあり、第一外国語、第二外国語の区別はなく、1 年次に204コマ（1 コマ50分）、2 年次に198コマの学習時間を設けている。[6] 日独戦争時の将校の多くは、陸軍中央幼年学校本科（予科の前身）を卒業しているが、ここには、語学所が併設（後に吸収）されている。情報収集能力を身につけるために、士官は語学を学ばなければならなかった。

1915年 3 月の陸軍歩兵大尉梅津美治郎による俘虜収容所視察報告では、通訳の問題について一章が割かれている。そこには、以下に示すように、通訳の語学力への不信と裏腹に将校の語学力への自負がある。

一．通訳ニ就テ

各収容所ニ配属セラレアル通訳ハ概シテ其学力充分ナラス。其読書力ニ於テハ多少見ルヘキモノナキニアラスト雖モ対話ニ至リテハ概ネ拙劣ナル為、所長若クハ衛戍司令官ノ意志ヲ正確ニ俘虜ニ伝達スルコト困難ナル

ノミナラス俘虜ニ対スル態度ニ於テモ往々俘虜ノ軽侮ヲ招クノ恐ナキ能ハス。殊ニ其通訳力ノ不足ハ往々帝国軍隊ノ威信ヲ失墜スルコトナキヲ保シ難シ。現ニ松山収容所視察ノ際同所収容俘虜大尉ステッヘル（……日本語ヲ解ス）小官ニ語ルニ左ノ言ヲ以テセリ

当所ノ通訳ハ拙劣ニシテ嘗テ当地衛戍司令官ノ俘虜ニ対シ訓示セラレルタル際ノ如キ日本語ヲ解セサル一般ノ俘虜将校ヲシテ衛戍司令官ニ対スル尊敬ノ念ヲ失ハシメタリ。仍テ予ハ後刻同僚ニ向テ其翻訳ノ誤レルコトヲ説キ予カ日本語ニ於テ解シ得タル所ヲ別ニ訳シテ伝ヘタルニ一同始メテ訓辞其者ノ拙劣ニアラスシテ全ク訳文ノ不適当ナリシコトヲ悟レリ

然ルニ松山ニ於ケル通訳ハ実際ニ於テ他所ノモノニ比シ特ニ劣レルニアラス。以テ其一般ヲ窺フヲ得ヘシ。（中略）。松山以外ノ収容所ニ於テモ通訳ハ対話ノ拙劣ナルノ故ヲ以テ軍ニ信書ノ検閲ノミニ使用シテ俘虜トノ対話ニハ所員将校ヲ使用セル所多シ。[7]

梅津大尉は、ドイツ語通訳の拙いドイツ語が、軍の権威を失墜させることを心配し、通訳には郵便の検閲業務だけをさせている収容所もあることを紹介している。郵便物の検閲には当時、支障が生じていた。収容所が開設してまもなくの12月には早くも丸亀衛戍司令官から「俘虜郵便物発送数制限の件伺い」が出されている。[8] それによれば約300名の俘虜を抱えた同収容所に 1 月16日から27日までに発送分として俘虜から提出された封書が709通、はがき437通、電報44通、同収容所へ送られた封書115通、はがき23通、電報が48通あり、これに書留、為替、小包、新聞等が加わる。その検閲にあたるのは所員 1 名と通訳 1 名であり、伺いが出された時点で650通が未発送であった。同伺いは、俘虜たちの発送する郵便物を制限することの許可を求め、同時に通訳の増員を要請している。翌年二月には同様の理由で徳島収容所も通訳の増員を求めた。[9]

しかし、梅津大尉は信書検閲についても通訳の能力を疑っている。通訳は検閲に必要な軍事的センスを持ち合わせていないから、である。梅津報告は、通訳は役に立たないので「全廃して」、代わりに語学のできる将校にすべて任せるべきだと結論づけ、将校に対する外国語教育をもっと「奨励」することを提言している。この提案は俘虜情報局の方針そのものではないにせよ、その後の通訳増員要求に対する情報局の態度に影響したかもしれない。郵便物の制限はその後、情報局から度々奨励されているのに対して、通訳増員の件は、梅津大尉の報告に前後して一度改正の指示が出ているのを最後に、公式の文書に現れない。

実際にはどの程度、通訳・将校を含めて語学堪能な職員は収容所にいたのであろうか。梅津報告の約七ヶ月後、シーメンス・シッケルト電気株式会社支配人のドレンクハーンが各収容所視察に出かけ、報告を残した。それによれば、各収容所とも通訳以外に大抵一人はドイツ語ができる士官が勤務していた。そして「語学ニ通スル」士官たちが俘虜たちの希望に沿う努力をしている収容所では収容所当局と捕虜の間に友好的な関係が保たれたという。[10] そのような収容所の模範として取りあげられているのが板東収容所（徳島県板野郡）である。しかしここでも、正規の職員は17人で、監視や警備には現地の警察の応援が必要であった。この17人の内、3 人が通訳（奏任官 1 人、判任官 2 人）であり、所長を除く将校は 4 人の尉官だった。尉官の中で、高木繁大尉、木越二郎中尉はドイツ語が特に堪能であったことが記されている。[11] つまり、同収容所でドイツ語でのコミュニケー

ションが可能な日本人は約千人の捕虜に対して 5 人であった。

2．『日本の俘虜収容所で摘んだ文体の花束』

1917年 4 月に丸亀、徳島、松山の三カ所の収容所を統合して開設された板東収容所には、既に日本での収容所生活にも慣れた捕虜たちが集まっていた。その捕虜たちが自前の印刷所で、週刊新聞『ディ・バラッケ』をはじめ出版した印刷物のなかに、“Ein Strauß Stilblüten”という冊子がある。日本人がドイツ語で書いた文書を、青島で日本軍が配布した降伏を勧める文書から、板東収容所以前の収容所で配布された規則集まで持ち寄り、あるいは自分の記憶から書き起こして、編集したものである。冊子のタイトルとなった“Stilblüten”とは、権威ある筋のひとがしゃれたことを言おうとして文体を練った挙句、失敗し、笑いを誘ってしまうことである。“Stil”は「文体」を意味するが、“Blüten”は「花」を意味する。「花」なので、この冊子は、「一冊」ではなく、“Ein Strauß”（一束）となった。

冊子のページ数は26ページである。発信地となる場所が記されているので、それに沿って、収録された項目あるいは段落数を拾っていくと、（徳島）規則42、（大阪）規則 1、（松山）挨拶 3、規則 1、命令 2、（丸亀）規則 1、火の取り扱い規則 4、将校の別れの挨拶 1、命令 1、（徳島）命令 1、（大阪）文房具屋からのセールスの手紙 1、（青島）日本の戦闘機から投下されたビラ 1、捕虜規則10、となる。これらの文章の中に含まれる誤りには、文法の誤りや語彙選択の誤りなどさまざまな種類のものがあり、一つの項目の中に重複していることもあるが、大きく分ければ、文の意味はもはや明らかでなくなり、文意は想像されるにとどまるもの、と文の意味は明らかであるが、規則集にふさわしい荘厳な表現ではないもの、の 2 種類に分かれる。

ドイツの代表的な報道週刊誌『シュピーゲル』の最後のページは毎号、地方新聞の記事や政治家の発言の中で、まじめに発言されているにもかかわらず、笑いを誘う表現を取り上げている。タイトルは異なるが、これが“Stilblüten”の例といえよう。現代ドイツ語においても官庁用語は、日常語とは明らかに区別される。『文体の花束』には歴史と伝統があるのだ。本稿においては、冊子の 3 箇所から例を紹介する。まず、

> Instruktionen für die Kriegsgefangenen（1914 Tsingtau）
>
> Den Kriegsgefangenen wird das Einkaufen jeder Geschmacksache und die briefliche Verkehrung unter der Besichtigung der Aufsichtsoffiziere gestattet.[12]

青島で公布されたこの文章は捕虜に一定の条件の下に購買や通信の自由を認める内容となっている。これにほぼ、同じ内容で、俘虜情報局が交付した俘虜取扱規則には、

> 第二十四条　俘虜自費ヲ以テ嗜好品其ノ他日常ノ物品ヲ購買セムコトヲ申出ツルトキハ監視将校ニ於テ支障ナ

シト認メタル場合ニ限リ之ニ相當スル便宜ヲ與フヘシ
第二十五条　俘虜ノ発受スル電信及郵便物ハ監視将校ニ於テ予メ之ヲ検閲シ支障ナキモノハ之ヲ許可シ暗号ノ使用其ノ他嫌疑アルモノハ其発送ヲ禁止又ハ之ヲ没収ス[13]

とある。ここで、「嗜好品」に訳されている“Geschmacksache”の“Geschmack”は「趣味、嗜好」、“Sache”は「事柄、もの、品」であり、日本語の意味をつなぎ合わせれば、たしかに「嗜好品」になる。しかし、「嗜好品」にあたるドイツ語は“Genußmittel”であり、通常“Geschmack”と“Sache”を合わせ、合成語の綴り“s”を入れた“Geschmackssache”は「人それぞれ、好みの問題」という意味である。さらに、同文において、郵便物のやり取りを意味する語として“Verkehrung”が用いられているが、“Briefverkehr”が正しい。“Verkehrung”では「あべこべ、さかさま」の意味になる。

次に各収容所では当然、火の元に注意を促したが、徳島収容所の規則集にある“Vor Feuerbrunst”では、失火ではなく、燃え盛る「大火」になる。これでは消火活動も手遅れである。“brennen”（燃える）の名詞形である“Brand”が正しい。さらに消火活動に使うホースは“Schlauch”であるが、規則集にある“Hose”では、英語では「ホース」の意味になるが、ドイツ語では、「ズボン」の意味である。[14] 収容所では隊ごとに消火器を扱う担当者を決めた。

最後に、丸亀収容所の「命令」を挙げたい。1915年、大正天皇即位に伴い、捕虜の中で何らかの禁忌に触れて罰を受けていた者に恩赦を与える内容である。

Beim Krönungsfeiertag, seine Majestät der Kaiser erbarmen die Kriegsgefangenen sich. Deswegen entlässt einen Verbrechern des Kriegsgefangenes, außerdem durch den Gottesnahmen Gewischt das alten Verbrechen von Papier ab. Seien sie verpflichten so dankenwerte Güte mit Ehrerbietung!（ママ）

（天皇陛下の即位式にあたり、陛下は戦争捕虜に対して慈悲の心をもって、捕虜のうち罪を犯した者一名を釈放され、神の名前において、書類上から犯罪の記録を抹消する。ありがたい御心を畏れ謹しんで受けるべし。）[14a]

第一文を訂正すると、“Anläßlich der Krönungsfeier erbarmen sich seine Majestät der Kaiser der Kriegsgefangenen.”となる。陛下と言う呼称に対して、三人称単数ではなく、複数形の人称変化を使うことは正しい。ただし、次の文では、陛下であっても、ドイツ語では「彼」という代名詞で受けるし、主語を入れなければ、正式なドイツ語としては成り立たない。しかし、日本語では、天皇を「彼」とは呼べないため、結局、主語なしで、その代わりに動詞を三人称単数変化形（“entlässt”）としたのであろう。

このような、間違いを集めることに、実益はないが、意味が通じなければ、規則に意味がなくなり、それは捕虜にとって有利でもあったろう。しかし、日本人に規則の意味を問いただしたり不服従の気持ちをもっていたのではなく、『文体の花束』は自分たちの娯楽のために印刷したのではないか。ただ捕虜たちは、ドイツ帝国のナショナリズムに基づいたドイツ語話者としての優越意識よりも、母語についてむしろ危機的な意識を持っていたのではないか、ということを、次の章より見ていきたい。

3．俘虜収容所内の外国語学習

捕虜たちの外国語の知識については、元捕虜たちの著書によって間接的に窺うことができる。そこで、今度は捕虜たちの手記に基づいて、考察したい。日本の東アジア協会（OAG）の会長を1920年から45年まで勤めたクルト・マイスナーは捕虜の生活を板東で過ごした。彼によれば、第一次大戦開始時に日本に在住していたドイツ人は約千人いて、[15] この内、118人が1914年 8 月の開戦とともに日本を離れ、青島のドイツ軍に加わり、捕虜として再び来日している。残りのドイツ人捕虜の多くはアジア地域から集められた予備兵だった。板東収容所では1,019人の捕虜の中で、職業軍人は99人にすぎない。同収容所の住人を代表する職業は、アジア地域で活躍する303人の商人であった。[16] 収容所の中にも、軍隊の階層は生きていたが、正規軍とは異なっていたのである。

板東収容所の捕虜が発行した新聞『ディ・バラッケ』が創刊されて間もない、第三号には、場所はどの町とも特定されることなく、東アジアで活躍するドイツ人商人の一日が“die Zigeunersprache des Ostens”（東のジプシー言語）として紹介される。「東のジプシー言語」とは、ドイツ語と英語の混成語を意味する。ドイツ語部分のみを日本語として、英語は英語表記のままにすると以下のような記事である。「太陽が昇ると morning と挨拶し、breakfast が第一回目の食事、その内容は porridge, jam, ham and eggs と茶で、boy が持ってくる。office へは rickshah か tram に乗って出かけ、その途中、newspaper を読むか、road の traffic を watch する」と始まり、事務所の様子、アフターファイブ、休日、社交、株式取引が同様に語られた後、「night cup と呼ばれる last drink を bar で飲み、少し gedamaged になって、最後は機嫌よく good night と別れの挨拶を言って」一日が終わる。[17] イギリスがフランスやスペインに対して、海外植民地における優位を確立してからは、困窮により、単純労働者としてアメリカへ移民するだけではなく、[18] もっと積極的に英語を勉強して、ビジネスに進出するライフスタイルが生まれた。しかし、出かけて行った先では、現地で「ボーイ」にものを頼むとき、英語で話すか、少なくとも英語交じりのドイツ語でなければ通じないという悲哀を味わったのである。しかも日本では、日本の兵隊に英語やドイツ語で話しかけてみたが、どちらも通じなかったと、マイスナー同様に、板東収容所の捕虜となったヨハネス・バルトは自伝の中で書いている。しかし手ぶり身振りで充分お互いの言いたいことはわかったという。[19] マイスナーは、戦前、日本で暖房やエレベーターを扱う会社を作り、バルトはゲルマニウムやシリコンなどの金属を輸入する商人だった。近代的な進取の精神に富んだはずのドイツ人たちにとっても、アジアでの生活は、様々な言語と文化の混成の坩堝に投げ込まれ、自身の土台である母国語自体が変質してしまうような体験であったことが、上記の「ジプシー言語」という表現に表れている。

青島からやってきたこれら様々な職種の人々は中国と中国語には強い関心を抱いていた。中国には、戦争の前年である1913年において2,949人のドイツ人が暮らしていた。日本人の80,219人（翌年は121,956人）、イギリス人の8,996人、アメリカ人、5,340人に数は遠く及ばないものの、4 番目に多い在中外国人である。[20] バルトの言葉によれば、「中国の長い歴史、その哲学及び芸術」に寄せる文化的な関心は高く、[21] 中国語の授業に加えて、板東収容所開設直後の1917年 5 月には中国事情の連

続講義「中国の夕べ」が始まり、同年だけで35回開催、翌年にも中国で生活した 8 人の話者による講演が続いた。受講者は当初、300人であったという。

多くの捕虜にとって、日本への関心は、偶然に日本へ来たことによる後発的なものであった。戦前から日本に暮らしていたドイツ人の中に、日本語ができるドイツ人捕虜がいて、彼らが収容所内のコミュニケーションに大きな役割を果たす。1915年 1 月の俘虜情報局第三回月報には各収容所で調べた「日本語ヲ解スル俘虜調査」が掲載されている（別表 2）。それによれば、日本語の能力については①日本語ヲ綴リ得ルモノ②日本ノ普通ノ新聞並同程度ノモノヲ綴ルモノ③日常ノ会話ニ差支エナキモノ④梢会話シウルモノ⑤単語ヲ解スルモノの五段階に分かれ、①に属する者が最上級者である。この調査によれば、約4600人とされるドイツ人捕虜の内、日本語による会話が少しでも可能なのは52人である。日本語ができるとされた捕虜は収容所開設と同時に通訳として雇用された。[22] 高等通訳はドイツ人士官と同じ待遇を受け、糧食費は日額50銭（少尉待遇）、被服新調費は細則付表第二号準士官の額に 3 割増、被服補修及び消耗品費は月額 6 円が支給されている。

板東収容所で収容所通訳を勤めたクルト・マイスナーは、板東に収容される以前に松山収容所に収容されていたが、そこで有志を集め、日本語の授業を行っていた。[23] その報告によれば、当初、ルドルフ・ランゲの教科書を用いていたが、1916年には自分で“Unterricht in der Japanischen Umgangssprache”を執筆したという。全部で70課あり、1916年の 1 年ですべての授業を終えている。松山収容所では手書きであったが、板東収容所では、印刷所で200部発行して授業に用いた。後に東アジア協会から再出版された際、マイスナーは前書きで、毎週 2 課ずつ、4 時間をかけて修得すれば、夏休みの休暇を入れても、一年間で全課終了することができ、会話を円滑に進められるようになるとしている。[24] 文章はすべてローマ字で書かれた。かな、漢字の練習は授業では行わず、捕虜たちはめいめい、小学校の教科書を使って自習することとしたという。

会話の内容は収容所での暮らし、通訳と医者との会話、商業問答などを扱っており、俘虜収容所に多かった商人を対象に、実践的な学習となるよう工夫されている。その読み物の一部を以下に紹介する。ここでいう「公会堂」とは捕虜たちが収容されていた松山公会堂のことである。原文はローマ字で書かれているが、本稿では、読みやすくするため、漢字・かなまじり文に直した。

公会堂の庭の散歩（第24課）

今日公会堂の庭の散歩をしましょう。そうです、運動は体の薬になりますから、毎日少し散歩をせなければならない。公会堂の東の方には衛兵がおる。しかし衛兵司令だけがおりまして、他の兵隊は皆食事を食べております。衛兵の向こうには玉転がし場がある。今私の友達は玉を転がしております。向こうの家はどんな家ですか？　はい、あれは公会堂の風呂場です。今の天気ははなはだ暑いですから、人が朝から晩まで水を浴びています。[25]

もし現在の日本語作文として添削するならば、第一文の「の」の連続を避けることや、最後の文の「人が」を別の表現にするなど、翻訳調ではない自然な日本語にすることになろう。また「せな

ければならない」は「する」の活用表に否定文の時「せない」「しない」両方可とされているので、誤植ではない。[26] 返事の仕方に「そうです」と「はい」があるが、「はい」は第三課で「相手の質問の意味がわかったという意味にすぎない」、と説明されている。そのために第一文の提案に応じるには、「そうです」を用いている。[27] このあたりは、独特な解釈に思われるが、全体を通して日本語版の“Stilblüten”に該当しそうな、間違いの文章は見当たらない。

こうして捕虜たちは、様々な学習をしながら、日々を過ごしていたが、これらの学習について、日本の世論や軍は必ずしも好意的に受け止めてはいなかった。[28] 陸軍騎兵少佐上田謙吉が梅津大尉より一ヶ月前の1915年 2 月に提出した俘虜収容所視察報告では、はっきりと捕虜たちの日本語学習に異を唱えている。

一．俘虜日常ノ起居動作
一般ニ俘虜ハ朝夕ノ点呼ヲ受ケ室内外ノ整頓清掃ヲ行ヒ食事ヲ為スノ他何等定マリタル仕事ナキヲ以テ或ハ手紙ヲ認メ或ハ洗濯ヲ為シ或ハ室内外ニ於テ遊戯シ逍遙シテ以テ漸ク日ヲ消シアル状況ナリトス。

将来教育時間ヲ定メ俘虜ニ何等カノ教育ヲ施サント考フル所アリ。徒ニ収容所職員ノ業務ヲ繁忙ナラシムルノミナラス。日本語其ノ他ヲ教育セントスル如キハ無用ニシテ寧ロ害アリ[29]

捕虜たちが暇を持て余しているのを認めつつも、学習については懐疑的であり、特に日本語学習には全く反対の立場である。双方向のコミュニケーションの円滑化は、軍には歓迎されなかった。

ところが結局、新聞の世論や軍は、「呑気な」[30] 捕虜たちを放任しつづける。捕虜たちを迎えた地元は、彼らの消費によって好景気がもたらされることを期待していたからである。捕虜たちの受け入れが進みつつあった1914年11月には和歌山市、徳島市から、俘虜収容所設置懇請書が陸軍省に提出された。[31] この内、徳島市には収容所が開設されたが、和歌山市の懇請は認められていない。捕虜受け入れの経済的な効果が上がった際立った例が、板東収容所で1918年 3 月 8 日から19日まで12日間にわたって展示会である。松江豊寿収容所長の報告によれば入場人員は12日間の延べで50,103人、ドイツ菓子の売り上げが573円、一品料理及び珈琲の売り上げは312円であり、会場周辺でも人力車や鉄道、周りの商店の収入が上がったことも述べられている。[32] 捕虜たちの新聞『ディ・バラッケ』も同年 1 月の特集記事の中で、展示場となった公会堂の修繕のため、町民たちが資金集めをしたこと、捕虜の作品には収容所当局があらかじめ買い手を確保したことなどを取りあげ、安心して制作に勤しむよう呼びかける。[33] 捕虜たちは、商売としてだけではなく、「ドイツ人の勤勉」と「ドイツ人の徹底ぶり」を日本人に見せる良い機会だとして、意気が上がった。[34] こうして開かれた展示会には、当時の日本の平均的な農村であった人口5,755人の板東町にとって未曾有の人と金銭が流れこんだ。日本の側からは何よりも町おこしの上で成功だったのである。松江所長の報告によれば、展示会のプログラムがドイツ語版、日本語版の双方で作成され、展示品の説明のために19人の「日本語ニ堪能ナル俘虜ヲ配置」した。物品だけではなく、学習した言語も、文化の垣根を越えて、行き来したのである。

４．異文化コミュニケーションの条件―ドイツの場合

第一次世界大戦が終結し、ドイツは敗戦国になった。ドイツ人が帰国する以前に、アルザス・ロレーヌ出身者がフランス人として、シロンスク出身者がポーランド人として帰国した。青島へは約120人が、オランダ領インドシナへは約250人が出発した。日本からは、戦争開始時に118人のドイツ人が青島へ出兵していたが、捕虜として収容された後に、170人が日本に残った。[35]

意思疎通が必ずしも求められない、それどころか、通じないほうが互いに有利ともいえるような状況で、それでも、敵国の言語を学び、文化を知る努力があったことについて、まずは、物理的な理由として、時間が豊富にあり、そして展示物が売れるといった経済的な要因を挙げるのが妥当であろう。さらに当時の日本は、国際主義の思潮の中、捕虜の扱いが、比較的穏便であったこと、収容されていたドイツ人の大半が軍人以外であったことなどを付け加えることができよう。本稿では、ドイツ人が外国語を学ぶ意味をドイツ人にとってのドイツ語の位置づけの側面から考察して、まとめとしたい。

間違ったドイツ語をわざわざ編集して出版したのはなぜであろうか。規則に縛られた収容所内で、用語の間違いを指摘することで、規則の施行を阻んだという意味での、穏やかな抵抗はあっただろう。しかし、『文体の花束』という題名の意味は、母語話者であっても、話したり書いたりすることに習熟していない人が上手に表現しようと無理をして犯す間違いが呼びおこす笑いであり、通常は間違いに含まれる相手の人間性を理解した上での暖かいユーモアである。嫌いな政治家の言葉を揶揄することもあるだろうが、板東収容所においては、捕虜たちは、規則内で最大限の自由を許され、日本人と良好な関係を築く中で、「第九」のコンサートを開演するまでに至った。冊子は、日本人のドイツ語の拙さそのものを取り上げたかったわけではない。むしろ、これらの表現のおかしさが、異なる言語と文化の間で、歩み寄りを生んだといってもよいのではないだろうか。

母語話者が非母語話者の誤用に気づいたときの対応の中には、コミュニケーションの無限の可能性がある。間違いはただ、正す対象としてあるのか、或いは寛容に受け止めるか、或いは、むしろ逆に自分の言語を相手に合わせて変形する選択肢もある。最後の例では、もう、誤用ではなくなり、新しい規範が生まれることになる。海外生活の中で、英語と混ざっていくドイツ語（“gedamaged”など）を考察していたときの危機意識が「東のジプシー言語」には反映されている。しかし収容所で集められた間違いは、ドイツ語の規範を意識するために編集され、逸脱を笑うことによって、捕虜たちは文化的なルーツを共有していることを確認したといえよう。

なぜ、外国で生活しながらも、また言語の専門家でなくとも、ドイツ語の規範を気にし続けることができたのであろうか。ドイツ人にとって、ドイツ語は常に、身近にあった強大な外国語との二重の構造の中に位置してきたからではないか。近代以前は、「ラテン語」に対する「俗語（teutsch＝deutsch）」としてのドイツ語があり、18世紀に入ると、知識人による啓蒙の言語としてフランス語が、経済では英語が、学ぶべき言語として意識される。近代国家を作るために、官庁用語となる標準ドイツ語と、文学活動の結果としてのドイツ語がこれに並んで作られてきた。ナチスが支配した時代

の極端な言語観の時期を除けば、ドイツ人自身の意識の中にあって、ドイツ語は、ドイツ語を取り巻く強い外国語と干渉しあい、この干渉がドイツ語の標準化へのたゆまぬ努力を生んだといえるだろう。言語が国語として通用するとは、特にドイツの場合、オリジナルな才能を持つ人間が当該言語を使用することではなく、それを支える編集者・出版者が言語の標準化に向けて努力しつづけることであったといえよう。このことが、板東収容所の冊子の根底にある、ドイツ人の、非母語話者の間違いに対する寛容やユーモアにつながっているのではないだろうか。板東収容所の日本語通訳だったマイスナーの祖父オットー・マイスナーはカール・マルクスの『資本論』の初版を1867年に刊行した出版業者であった。マイスナーはこのことを「世界史を変えたこと」として紹介している。マイスナー自身が、長年にわたってドイツ人に向けて日本語や日本文化を紹介することで、文化を翻訳し続けた編集者であったこと、その自負もここに秘められているのではないだろうか。[36]

どのような間違いを含んでいようと、言語は他者の差し出す鏡に映し出されて、伝達される。非母語話者の間違いの中に、思ってもいない自国語の表現の可能性に気づくこともある。出自の文化や言語と絶えず向き合うことと、異文化との豊かなコミュニケーションは軌を一にするのである。

＊活字にするのが大変遅くなりましたが、鳴門市ドイツ館の資料についてアドバイスを頂きました田村一郎先生と、資料のドイツ語を指導していただいたディルク・ギュンターさんにお礼を申し上げます。

別表 1　各部隊に配属すべき通訳の人員に関する件

	中国語	ドイツ語	英語
師団司令部	5	3	2(4)
歩兵旅団司令部	1	1	0
歩兵連隊	3	0	0
騎兵連隊	2	1(0)	0
砲兵連隊	2	0	0
独立砲兵大隊	1	0	0
工兵（工兵独立）大隊	2	0	0
鉄道連隊	3	1	0
衛生隊	1	0	0
師団輜重	4	0	0
野戦電信隊	1	0	0
航空隊	1	0	0
兵站（甲）司令部	12	1	1(3)
兵站（乙）司令部	6	0	0
攻城廠	1	0	0
碇泊場司令部	2	0	0(1)
輜重監視隊	1	0	0
歩兵独立大隊	1	0	0

（『欧受大日記』、大正 3 年 8 月、8 月 31 日結。書類中の日付は 8 月 18 日付、括弧内の数字は 8 月 28 日の訂正。）

別表 2　日本語ヲ解スル俘虜調査表

	①	②	③	④	⑤	計
東　　京	0	0	1	1	0	2
静　　岡	0	0	2	0	0	2
名 古 屋	0	0	2	2	0	4
大　　阪	0	0	1	0	0	1
姫　　路	0	0	0	0	0	0
徳　　島	0	0	0	1	0	1
丸　　亀	0	0	2	0	0	2
松　　山	0	0	4	0	10	14
福　　岡	0	0	0	2	5	7
久 留 米	0	0	3	0	0	3
熊　　本	2	1	7	3	1	14
大　　分	0	0	2	0	0	2
合　　計	2	1	24	9	16	52

①日本語ヲ綴リ得ルモノ
②日本ノ普通ノ新聞並ビ同程度ノモノヲ綴ルモノ
③日常ノ会話ニ差シ支エナキモノ
④梢会話シウルモノ
⑤単語ヲ解スルモノ

病院入院中の俘虜は除く。

大正 3 年 12 月下旬調べ

（『欧受大日記』、大正 4 年 1 月下、1 月 30 日結、「俘虜情報局第三回月報」）

注

1　『松山収容　露国俘虜』、松山収容所、代表者　河野春庵、松山収容所出版、明治39年
2　『欧受大日記』、旧陸軍省、大正 3 年 8 月下、8 月31日結
3　『欧受大日記』、大正 4 年 3 月上、3 月 3 日結、「俘虜収容所職員表中改正ノ件」
4　『「第九」の里　ドイツ村』、林啓介、平成 5 年、井上書房
5　『欧受大日記』、大正 3 年 9 月上、9 月 6 日結、「語学ニ通スル将校以下員数ニ関スル件」
6　『陸軍士官学校』、山崎正男編、秋元書房、（防衛庁図書館蔵）、16,17ページ
7　『欧受大日記』、大正 4 年 3 月上、3 月 8 日結
8　同上、大正 3 年12月、12月12日結
9　同上、大正 4 年 2 月、2 月 4 日結
10　『日独戦争ノ際俘虜情報局設置並独国俘虜関係雑纂』、1915 年 10 月 25 日、（外務省史料館蔵）、“11. Bericht über die Deutschen Kriegsgefangenen aus Tsingtau”, N. Dreckhahn, S. 10. 該当箇所の原文は以下の通り. “In jedem Lager ist meistens 1 Offizier, der außer dem Dolmetscher deutsch spricht, viele von diesen waren in Deutschland. Von den rangältesten Offizieren sprechen einige deutsch, einige verstehen wenigstens deutsch, andere französisch. Im allgemeinen geben sich diese Offiziere, den Intentionen des KM. folgend, Mühe, im Rahmen der Bestimmungen den Wünschen gerecht zu werden. In solchen Lagern herrscht eine gute Verständigung und ein gegenseitiges freundliches Verhältnis.”
11　『「第九」の里　ドイツ村』、26、27 ページ

12 “Ein Strauß Stilblüten”, Kriegsgefangenenlager Bando, 出版年未詳、S.12.　以下。本稿では、この冊子を『文体の花束』と称する。

13 『日独戦争ノ際俘虜情報局設置並独国俘虜関係雑纂』、第 1 巻ノ一

14 “Ein Strauß Stilblüten”, S.9, S.17.

14a 同上、S.19.

15 “Deutsche in Japan”, Kurt Meissner, 1961, Tokyo, Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens (OAG).

16 “Die Baracke”, Kriegsgefangenenlager Bando, 16. 2. 1919, S.452.　“Wir Bandoer”（OAG 所蔵）、及び『「第九」の里　ドイツ村』、28ページ

17 “Die Baracke”, Bd. 1, S. 35-40. 翻刻・校訂　大和啓祐、鳴門市、平成10年

18 的場昭弘「19世紀ドイツ人移民の旅」、宮崎揚弘編『ヨーロッパ世界と旅』、1997年、法政大学出版局

19 “Als deutscher Kaufmann in Fernost”, Johannes Barth, Erich Schmidt Verlag, Berlin, 1984, S.55.

20 『植民都市青島　1914–1931』ヴォルフガング・バウアー、大津留厚監訳、昭和堂、2007年、153ページ、201ページ

21 同上、S.51.

22 『欧受大日記』、大正 3 年12月、12月21日結、「俘虜高等通訳給与の件」の中で、東京俘虜収容所が給与支払いについての確認を求めている。

23 “Kurzer Bericht über die Tätigkeit im Lager Bando, soweit sie auf Ostasien Bezug hat”, Kurt Meissner, In : Mitteilungen Bd. 17, 1922, OAG

24 “Unterricht in der Japanischen Umgagnssprache”, Kurt Meissner, 1936, Kyo Bun Kwan, Tokio. 松山収容所で書かれた原稿は1936年の再版に比べ、収容所の生活を扱った内容が多い。“Takahama”（青島から到着したときの様子）や“Dogo”（道後温泉）は、36年の再版では削除された。

25 同上、S.87.

26 同上、S.81.「23課」

27 同上、S.9.

28 大正 5 年 9 月16日大阪毎日新聞より。「大正ニュース事典　2」、毎日コミュニケーションズ、1986年、500ページ

29 『欧受大日記』、大正 4 年 2 月、2 月 9 日結

30 注29

31 『欧受大日記』、大正 3 年11月上、11月15日結。なお、『松山収容　露国俘虜』「第六編地方ニ及ホシタル影響」328ページ以下には、日露戦争時の松山の好景気について叙述され、ロシアの俘虜たちが消費した金額は「五十余万円ノ多キニ達シ」たとされる。

32 『欧受大日記』、大正 7 年 5 月、5 月24日結

33 “Die Baracke”, Bd1, S.323ff., “Unsere Ausstellung”.

34 a.a. O, S.324.

35 「1993年度研究報告書―元俘虜の『日本』研究（その 1）」、田村一郎、7 ページ

36 “Sechzig Jahre in Japan”, Kurt und Hanni Meißner, 1973, Hans Christians, Hamburg, S.5.

Zur Kommunikation auf deutsch und auf japanisch im deutschen Kriegsgefangenenlager Bando

Setsuko ICHIDA-KAKIMOTO

Während des Ersten Weltkriegs wurden die Deutschen in Tsingtau von Engländern und Japanern besiegt. Etwa 4 600 Deutsche wurden als Kriegsgefangene nach Japan gebracht und verbrachten dort 4 oder 5 Jahre bis Kriegsende. Damals lernten viele japanische Offiziere in der Militärschule Deutsch, und die Vorschriften für das Kriegsgefangenenlager wurden auf deutsch formuliert. In dem Heft "Stilblüten, gepflückt in japanischer Kriegsgefangenschaft", das im Kriegsgefangenenlager Bando erschienen ist, wird fehlerhaftes Deutsch der Japaner humorvoll aufgespießt. Deutsche versuchten aber auch, Japanisch zu lernen.

Damals sprachen die meisten deutschen Geschäftsleute in Asien Englisch und manchmal mit Englisch vermischtes Deutsch. Dass deutschen Kriegsgefangenen fehlerhaftes Deutsch von Japanern so auffiel, zeigt einerseits, dass man sich auch im Ausland, wo man sich meist auf englisch verständigt, der Normen der deutschen Sprache bewußt ist, andererseits betont man im Lachen seine Zugehörigkeit zur deutschen Kultur.